

インターバンクの声（2015年1月5日）

12月30日から31日に日付けが変わろうとする時間に118円台に差し込む場面があったドル円相場だが、新年2日には何事もなかったように120円台に戻っている。その2日、ニューヨーク時間に発表された12月の米サプライ協会（ISM）製造業指数や11月の建設支出が市場予想を下回ったことで、120円台後半から119円台までドルが売り込まれたものの、株価が値を戻したことや根本的なドル金利の上昇見通しが強いためか、ゆっくりとドルが反発した。ただ、年初の為替市場で主役となりそうなものは、ドル円以上にゆっくりだが確実にドルに対して売り込まれ続けているユーロ、豪ドル、英ポンドといった通貨になりそうだ。週明けの今朝7時時点では、これらの通貨はいずれも窓を空けてのオープンになっている。昨年終盤からずっと囁かれている欧州中央銀行（ECB）の追加金融緩和の実施が、新年に入ってから独紙によるインタビューで、ドラギ総裁がその可能性を示唆したことで、遂に1.20ドルを割り込んでしまった。豪ドルも0.80ドル割れに迫っており、これらの通貨は2010年初夏の安値を下回るかどうかは差し当たっての注目だ。

提供：SBIリクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。